The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	低温センターだより編集員長就任のご挨拶
Author(s)	井澤, 公一
Citation	大阪大学低温センターだより. 2023, 173, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

低温センターだより編集員長就任のご挨拶

基礎工学研究科　井澤　公一
E-mail：izawa@mp.es.osaka-u.ac.jp

先日、とある会合で本学の低温センターの歴史に関する話を聞く機会がありました。着任してから早5年ほどになりますが、恥ずかしいことに、その時初めて本学が全国で2番目（1959年）にヘリウム液化機が設置された大学であることを知りました。ヘリウム液化機が日本で最初に設置されたのが東北大学であることは有名な話ですが、本学にもそれに匹敵する歴史があったことを今更ながら驚きとともに認識した次第です。そこでもう少し詳細が知りたいと思い、大阪大学低温センター20周年記念誌「低温の歩跡」を入手し、拝読いたしました。東北大学に液化機が設置された頃、低温科学をめぐる様々な思惑が錯綜する中で物性研究所を東京大学に置くかわりに大阪大学にヘリウム液化機とともに極低温実験室を設置することになったという経緯、諸外国から遅れをとっていた当時の我が国の低温科学の状況、また、その遅れを取り戻し我が国の低温科学を発展させようとご尽力された方々の強い思いや努力の様子などが迫力のある文章にまとめられ綴られています。今日の恵まれた研究環境が、そのような多くの方々の情熱や努力の上にあると思うと、感服するとともに、より発展させ次に繋げてゆかなければならないという使命感に駆られずにはいられませんでした。

さて、この度、低温センターだよりの編集委員長を拝命いたしました。お話を頂いたときには、軽い気持ちでお引き受けいたしましたが、1973年の第1号から半世紀に渡り絶え間なく刊行されてきたという歴史の重みを今ごろになってひしひしと感じ、安請け合いをしてしまったという思いが日に日に増しております…と弱音を吐いていても始まらないので、編集委員長就任にあたり思うところを少し書かせていただきたいと思います。

「低温の歩跡」に書かれている低温研究の黎明期からおよそ半世紀経った現在、全国的に見ても低温科学やそれを取り巻く環境が劇的に変化しようとしています。特にヘリウムの世界的な供給不足や電気代の高騰など、低温研究を脅かす大問題が多発しており、全国の低温研究に関わる方々が頭を抱えているところだと思います。また、ヘリウム供給不足に加え無冷媒冷凍機の普及や新型コロナウイルス感染拡大などの影響によるヘリウム使用量の減少、さらには改組による低温センターの統廃合など、全国の大学の状況を見ていると、低温センターのあり方や役割を改めて考え直さなければならない時期が来ているのかもしれないという印象をもちます。その一方で、「低温の歩跡」を見ていると、昔から変わることのない普遍的で重要な価値観があることに気付かされます。低温センターだよりを例に取れば、阪大オリジナルの研究や技術の掲載を強く意識すること、分野を超えた研究者のつながりや共同研究のきっかけになること、が初期の頃から基本方針として掲げられております。その重要性は今も変わってはおらず、それらを明確に打ち立て守ってきたからこそ、いまのセンターだよりがあるのだと思います。

先日、編集委員長として最初の編集委員会を開催しました。本号の内容を決定した後、良い機会でしたので、低温センターおよびセンターだよりを取り巻く環境の変化を踏まえ、今後の低温センターだよりのあり方について編集委員の方々の意見を伺いました。依然、阪大オリジナルの成果の発信や学内外の研究者を結びつけるための情報発信源として重要な役割を担っており、今後も欠かせないという認識で一致いたしました。守るべき伝統を守りつつ、時代の変化にうまく適応したより発展的なものになるよう努めたいと考えております。そのためには皆様方のご協力なくしては考えられませんので、ぜひお力をお貸いただければと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。